

神奈川大学 学校ボランティアの歩み 2017–2019

—教師を目指す学生たちの教師観の形成を支援して—

鈴木 英夫 / 鹿島 寛

はじめに

この小論では、神奈川大学資格教育課程センター所属の神大ユースサポートプロジェクト（以下JYSPと略）が、どのように神奈川大学の学校等ボランティアを運営してきたのかを記したい。JYSPでは、教職課程に所属し、将来教師を目指す学生に、学校等ボランティア活動を提供してきた。主な活動内容は、近隣中学校を中心とする学校ボランティア活動と困難を抱える中学生を対象とした学習支援活動（JIN-KANA学習塾という名称で運営している。）である。神奈川大学の学校ボランティア活動は、大学側が活動場所を紹介したり斡旋したりするだけでなく、大学教員による学校訪問や、活動学校ごとの振り返り（学校別カンファレンスと呼んでいる）、レポート作成とその指導なども実施している。学生たちは、活動と振り返りの中で教師としての構えを学ぶ。学びを支えるため、専任教員1、校長等経験者の学習アドバイザー2（教職に関する相談なども行なっている。）事務職員1のスタッフが配置されている。学校ボランティア活動と学習支援活動のそれぞれの実態について、2017年から2019年の活動について記録としての意味も込めてこの誌面を借りて整理しておきたいと思う。尚、JIN-KANA学習塾については鹿島、それ以外を鈴木が分担して執筆する。

1 経験し学習することについて

学んだことはどうしたら実践に結びつくのだろうか。何かを学びおぼえることは何のためなのか。見よう見まねだけで適切な実践力は身につくのか。「学んだこと」が「実践」に結びつき、より良い実践者になるためには、様々な振り返りが必要である。

大学の教室ではできないことは、教育の対象である子どもとの関わりから学ぶ活動である。教師の仕事の難しさは、教育しようとする内容をいくら上手に説明しても、その説明を聞いた子どもが理解し学習するとは限らないからである。教えるという行為は、教わる対象者がいて成立する行為であるが、教師は教えたことをアリバイにして、学ばないのは生徒が不十分にしか取り組んでいないからだ、学ぶ側に全ての責任を転嫁する場合もある。教える、育てるという行為は、教わり育つ生徒なしには成立しない。教わる生徒がいて初めて、教えることが可能だという感覚は大学の教室の中だけでは身につかない。そのことは学生にも十分にわかっているから教育実習に大きなプレッシャーを感じて、必至に教材研究をして教育実習に臨む。学生にとっては、黒板を背にした授業が最大の難題だから、そのために教材研究をして、生徒との関係づくりをして、授業に取り組む。実は、このような状況の中、教育実習生は自分のことで精一杯であり、生徒一人ひとりの学習や成長を見とる余裕はない。学校ボランティアの素晴らしいところは、実習生のように追い詰められて何か見せなければならぬ授業がないことである。ボランティアの学生たちは、子ども一人ひとりの反応を観察し、教師の言動を観察する。そして、その日に期待されたことを教諭の指導のもとに、補助的活動をする。だから、活動にも観察にも余裕があり、活動しながら、考えることができる。

教師力として欠かすことができないが、なかなか身につかないのが、子ども一人ひとりの異なる事情を考えたり、一人ひとりの発達や達成したことを見とり、適切な声かけをする力、すなわち「子どもの成長と向き合う力」である。「子どもの成長と向き合う力」は、例えば社会科教育の基礎学力のように、扇状地や河岸段丘などの地形名を知っている、その発生過程を説明できる、その土地利用について個別具体的な知識を持っている、などの教科の専門的な力とは違い、何か書物を学んだからといって身につく力ではない。教えるということは、教わる側がどう学ぶかという想定なしには成り立たない。学ぶ側＝生徒の学習の見とりこそが重要であることを理解しないで教師になると、知識にだけ依拠して授業や指導を組み立て、学ばないのは生徒の努力不足であるとする割り切り方をする教師になる。学ぶ側である子どもが、どんな不安や期待や決意を持ち、どんな自信やどんな経験をもとに、学びに立ち向かうのかを想像し、見とる力こそ、教科の専門的知識に加えて、教師のもう半分の力、すなわち「子どもの成長と向き合う力」なのである。

教師を目指す学生たちに獲得して欲しいことは、知的に成長し、学び続けていくための基礎的な力と「子どもとの成長と向き合う力」である。知的な成長は、学部の専門的な科

目と教科教育法の授業で、自分が生涯にわたって携わる教科の学問と出会うことによって始まる。知的な成長は、教師にとっての永遠の課題であり、これで完成ということは無い。自分の教科の知識と真摯に向き合い、学び続ける力こそ教師にとって重要な資質である。一方、子どもの成長と向き合う力は、教職科目のみでは身につかない。もちろん、教育実習を体験したから、学校ボランティア体験をしたからといって身につくものではないが、神奈川大学の学校等ボランティア活動は、まさに「子どもの成長に向き合う力」を向上させる活動となっている。

ここで特に整理しておきたいことは活動することと振り返ることの関係である。経験学習で著名なコルブはその著書の中で、「学びの第一ステップは、自分は学習者であるということを受け入れ、自分の学ぶ能力に自信を持つことです。」と述べている⁽¹⁾。神奈川大学の学校ボランティア活動は、長年の積み重ねの中で、ボランティア経験者と初心者がグループで話し合うことを通して学び合う仕組みができています。これを学校別カンファレンスと呼んでいる。学校ボランティア活動に初めて参加した学生は、先輩のボランティア経験者から学ぶことができる。学校ボランティアにどう関わるべきかは、その学校毎に活動の内容が違い、子どもが違い、現場の教諭の指示や動きが異なる。初めて参加した学生は、学校の中で活動し、大学のカンファレンスの中で学ぶ。自分は学校ボランティアの学習者であることを自覚し、先輩に支えられながら活動することができている。

松尾はコルブの経験学習のサイクルについて述べている。松尾は、「このモデルによると、人は、①「具体的経験」をした後、②その内容を「内省し（振り返り）」、③そこから「教訓」を引き出して、④その教訓を「新しい状況に適用する」ことで学んでいるのです。」とコルブの経験学習を整理した後で、「ここで大事なことは、「振り返り」と「教訓の引き出し」です。単なる経験のしっぱなしでは、何も得ることができません。」と述べている⁽²⁾。神奈川大学の学校ボランティア活動の場合、学生たちは自分一人で教師に混じって活動し、活動しながら考え、それを日誌に記述することで振り返り、その日誌をもとに同じ活動場所の学生が気づいたことや学んだと思ったことなどを学校別カンファレンスで語り合うという活動を通して、「振り返り」と「教訓の引き出し」を行なっている。

学校ボランティアは経験するだけでは、子どもと向き合う力は身につかない。ボランティアを継続してきた先輩学生たちと語り合い、大学教員を交えて毎月、集団で振り返りのミーティングを継続し、毎回の活動日誌を残し、半年に一回1000字程度のレポートを書き、さらに振り返りのカンファレンスをするという重層的な振り返り活動がボランティ

ア経験からの学びを生み出している。経験する場を提供し、近隣中学校との信頼関係の中で経験することを支え、学校別カンファレンスを通して先輩学生から学び、振り返り、活動日誌を通して体験を言葉に変え、半期毎のレポートで自分の歩みを振り返り、そのレポートをもとにまた振り返りをするという、活動の蓄積から構築された、経験と振り返りのシステムが、学生の学校ボランティア体験を支えている。

2 神奈川大学学校ボランティアの歩み

(1) この3年間の推移と活動内容

私が、入江直子神奈川大学名誉教授から学校等ボランティア活動の担当を引き継いだのは、2017年である。これまでの経緯については、入江直子が詳しく述べているので、そちらを参照していただきたい⁽³⁾。また、大学内の学習支援活動であるJIN-KANA学習塾については別に章を立てて述べるので、この章では扱わない。

以下の表は、学校ボランティア活動の活動単位別の参加人数である。(各年度7月統計)

表 1

年度	栗田谷中	松本中	六角橋中	川崎市中学校	その他市内小中学校
2017	8	6	7	1	6
2018	10	6	5	8	5
2019	9	9	9	10	5

学生は教師になりたいという思いを持って学校等ボランティア活動に参加するので、だいたい2年生からが多い。大学4年では採用試験や教育実習など卒業準備が忙しくなるのでボランティア活動を停止する学生と卒業していく学生がいるので、新たなボランティア

図 1

3 年間スケジュール

(1) 全体カンファレンス

4月19日金曜日 19時から / 7月19日金曜日 19時から
10月4日金曜日 19時から / 1月10日金曜日 19時から

(2) 研究交流会、ボランティア報告会

1月か2月 日程未定 例年は土曜日開催

(3) 学校ボランティア説明会 (新たにボランティアを始めようとする学生のために開催)

4月9日 昼休み / 9月27日 昼休み / 1月28日 昼休み

学生の発掘が欠かせない。その為には、年間に3回はボランティア説明会を開催し、学校ボランティアについての説明と相談を開催している。学生には年度当初に、年間スケジュールで、学校を超えたカンファレンスである全体カンファレンスと学校ボランティア説明会の日程を示している。ボランティア説明会は、年度当初、後期はじめ、後期終わりの3回実施している。

(2) 活動に参加した学生が得たこと

学生たちは、大学の授業の空き時間を探して、個人毎に違う曜日の午前中に活動している。学生によっては活動日が重なる場合もあり、中学校側から見れば、この日は学生が複数来ているが、この曜日は活動する学生がいない曜日ということになる。このように、大学側のわがままを受容してもらえるのも、大学と学校との長い年月の信頼関係のなせる技である。学生は、活動する度に簡単な活動日誌を作成している。活動したこと、見て学んだことは文字にして残しておかないと、後で振り返れない、学んだことがすり抜けていかないように、記録を残させている。

*以下、2018年の日誌から一部引用

学生A「今日は嬉しいことにいつも一緒に走っている女子生徒の記録が更新できた。走る前から記録更新を頑張ろうと意気込んでおり、いつもなら「足が痛い」とめげてしまうが、今日は一度も言わなかった。ペースは落ちたり、上がったりと不安定だったが、頑張ろうとする姿勢がいつもよりあり、すごくうれしかった。」

学生B「今日は先生の生徒への対応について学びました。50分の中で生徒の良いところを見つけ、生徒全員の前で褒めるという行為をして、自分も真似したいと思いました。」

学生C「今日は畑の作業で集中できない生徒の姿が目立った。先生の指示の的確さを学ぶと同時に自分の無力さを痛感した。これからまだまだ学んでいきたい。」

A, B, Cともに同じ中学校の個別支援学級で情緒障害や知的遅れのある子どもたちの対応を、学校の先生方の指導のもとお手伝いをさせていただいている。最初は子どもに近づけない、先生の指導の意味を読み取れないなど、学校ボランティアとして役立たない存在であるが、毎週決まった時間に同じところで活動し、数ヶ月経つと、この記録に見られるように、子どもの挑戦を支援したり、達成できたことをともに喜んだり、教師の対応力の多様さから学んだり、自分の立ち位置や力量の不足に気づいたりたくさんの学びを得ていることがわかる。学生はこうして、活動するたびに教師や子どもについて沢山の気づき

を得て、教師への道を歩み続けようと志を確かにする。

また、半年に一回活動レポートを作成している。このレポートは冊子にして、活動学生全員と学内の教職課程の専任教員に配布するとともに、お世話になった小中学校にもお届けをしている。その為に、内容については学習アドバイザーが内容チェックをしている。というのは、学生の表現によっては、この学校でいじめがありましたというような報告になってしまい、対応をしている学校に迷惑をかける可能性があるからである。今時は、SNSなどで情報が独り歩きするから、お世話になっている学校を守るためにも、活動している学生を守るためにも記述内容の危機管理は必要である。

同じ学生のレポートを抜粋すると、前期のレポートでは、
学生A「できることが一個ずつでも確実に成長している。そのことを思うとすごく嬉しかった。(中略)生徒の成長を感じられた、そしてやりがいを感じられた1時間であった。」

学生B「私は教室に入り、様々な生徒のもとへ行き「おはよう！」と明るく挨拶をしてから様々な話をした。(中略)このように活動をしているうちに生徒たちは朝、私が教室に入ると生徒たちの方から「おはようございます！」と挨拶をしてくれるようになった。」

と記述して、ボランティア活動を始めてから、勇気を出して生徒に近づいて行ったり、生徒の成長に自分が役立ったりしていることを実感した体験を書いている⁽⁴⁾。

1年活動が続けた後の後半期のレポートでは、
学生A「先生の起こす行動や声かけについて、朝の会や授業終わりに先生方からの一言があるのだが、最近まで私自身が一生徒としてなんとなく聞いてしまっていたことに、恥ずかしながら半年経った頃気が付いた。それからというもの、今の言葉はこういう意味があるのではないかと考えるようになった。」

学生B「1年間のボランティア活動を通して、一人で多くの生徒を見ることは想像をしていた以上に大変であるということを感じました。また、先生方のチーム力を近くで見させていただき、教員同士の連携の大切さを学びました。」

など、自分の視点の変化や深まりにも付いた記述である⁽⁵⁾。

(3) 受け入れ側である中学校のとらえ

主にこの10年継続的に受け入れていただいているのは、横浜市立松本中学校、横浜市

立栗田谷中学校、横浜国立六角橋中学校である。そのほかにも、近隣小中学校、川崎市内の複数の中学校も受け入れを継続していただいている。

六角橋中学校での活動は、個別支援学級のお手伝いである。六角橋中学校の個別支援学級はたまたま生徒数が多いので、神奈川大学の学生の手伝いを期待していただいている。というよりも、期待できるように育てていただいているので、期待に沿う活動ができているのだと思う。六角橋中学校で活動を継続して来たある学生は、個別支援級の先生や校長に適性を見込まれ、臨時任用教諭への道を開いていただいた。学校現場の先生方が、学生を育てようとしてくださっている一つの証拠である。

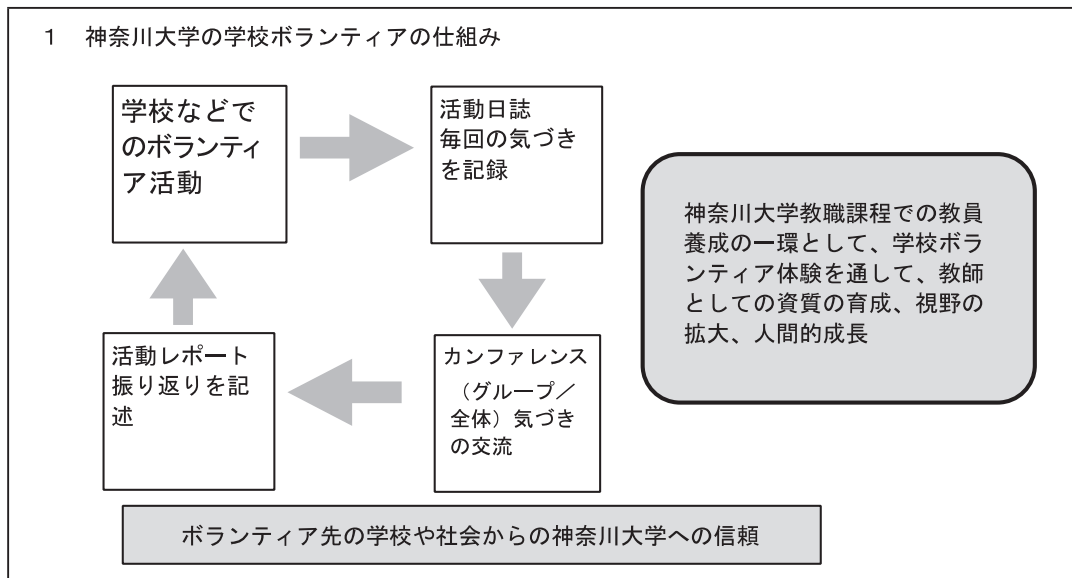
松本中学校は、偶然であるが神奈川大学の卒業生教諭が比較的多く働いている。先輩たちは、様々な場面で学生ボランティアに声をかけて、適切な動きができるよう助言してくれている。松本中は基本的に、授業アシスタントである。学校正門前に車通りの多い道路があるので、朝の登校支援から1日が始まる。松本中学校校長は、ボランティア学生の1日の活動終了時に時間を見つけて、振り返りのできるような声かけをしていただいていた、活動学生の励みになっている。

栗田谷中学校は、授業アシスタントと個別支援学級の支援をミックスして活動できるようにしてくれている。栗田谷中学校校長からは、「学生が来てくれると、若手の教員が元気になる。」との発言もいただいている。一昨年と今年、栗田谷中学校では、若手教員と学校ボランティア大学生との交流会も開くことができた。この交流会では、大学生が若手教員に「なぜ先生を目指したのですか」「いつから目指したのですか」「働く時間と余暇の時間をどうやってコントロールしていますか」などの質問が飛ぶ。初任から3年目ぐらいまでの経験の浅い教員たちが丁寧に答えてくれる。彼ら教員たちも、答えながら自分の歩みを確かめている。2019年7月の合同ミーティングでは、大学生からの「授業をするときに大切にしていることはなんですか」との質問に、「発言してくれた生徒の勇気を尊重し、どのような内容でも大切に受け止めて授業に生かしている」との初任教諭の発言は、生徒の目線に立った授業経営であり、参加した大学生はその言葉の重みを理解して大いに納得していた。校長は、「大学生が来てくれることを楽しみにしている生徒もいる。多くの人と関りのなかで中学生が育っていくのは素晴らしいことだと思う」と、学生一人ひとりの個性と中学生の個性が響き合う瞬間に価値を認めてくれている。学生は手数としてのボランティアではなく、名前と体を持った人格として、中学生にも教員たちにも認められている。そのような中で、大学生も自分を再確認し、教師への道ばかりでなく、自分の存在を

確認して成長している。このような関係は、10年以上の大学と近隣中学校との信頼関係が支えている。現場経験である学校ボランティア活動には、そのような条件が整っていることが重大な影響を及ぼしている。とはいえ、関係づくりは人と人との関係であるから、双方関係者の努力の継続なしにはなりたない。

3 神奈川大学学校ボランティアの学習システム

図2



(1) 全体像

神奈川大学の学校ボランティアでは、活動の紹介、活動の開始、集団での振り返り、再び活動、個人での振り返り、学校関係者との交流が長い年月の中、形として定着してきている。図にあるように、活動と記録やレポートを通しての内省、語り合いの場で語り聞き取ることでの振り返りは、活動の振り返りのサイクルとして機能している。受け入れてくださっている学校現場も、このようなサイクルで学生たちが学校ボランティアに取り組んでいることを知っている。だから、新たに紹介した学生も安心して受け入れてくれる。学生たちは、1000字程度の活動レポートを半年に一回作成し、そのレポートを用いて、学校を超えたカンファレンスを実施する。レポートは冊子に整理して、学校現場にもお渡ししている。年度末には、神奈川大学教育研究交流会に近隣学校の校長や教諭に来ていただき、

ボランティア活動をしている学生と本学教員も加わって、100人以上でグループに分かれて、振り返りをすることもすっかり定着している。これも、地域の学校と大学との信頼関係の維持継続には大いに役立っている。

(2) 学校別カンファレンス

学校別カンファレンスでは、学校ごとに月に一度程度集まり、学生が司会をして、活動で気づいたことなどを交流し合う。同じ学校で同じ生徒、同じ教師を見て、活動してきた学生たちが、自分の見た

こと、考えたこと、気づいたことを語り合う。その語りに、大学教員や学習アドバイザー（現場で校長等を体験した実務家）も加わり、活動や気づきの意味づけを手伝ったり、教師の活動の意味を説明したりする。学生たちは、学校別カンファレンスの場で、自分の感じたことを再確認し、次の活動への見通しがわかり、活動のエネルギーを得ている。

図3



* 左は学校、JIN-KANA 混在グループの編成表、右は混在グループでの全体カンファレンスの様子。

(3) 全体カンファレンス

全体カンファレンスは、実質的に年に2回である。全体カンファレンスは、学校別やJIN-KANA学習塾だけで行われていたカンファレンスをあえて、活動先をミックスして5人程度でカンファレンスを進める。自分とは異なる環境でボランティア活動をしている学生に自分の体験や気づきを語る。聞いた学生たちは、内容を掘り下げるような質問をして語った学生のより深い気づきを手伝っている。

学生たちは、初心者も巻き込んで上手にカンファレンスを進めることができる。一人が語り、皆が質問して活動を深めるという目的がよく理解できている。5人グループで大体1時間30分程度熱心に語り合う、ボランティア活動指導の歴史的積み重ねが学生の力を育てていることがわかる。

4 JIN-KANA 学習塾の現在

2010年度、横浜市こども青少年局から「困難を抱える青少年に対する進路選択支援事業～小・中学生を中心とした生活・学習支援モデル」を受託し、JYSPという学内組織がスタートした。主な活動は①「学校ボランティア」・「神中ブロック」をモデルとした包括支援プロジェクト②外国につながる子どもたちの支援プロジェクト③「青少年の居場所」プロジェクトの3点である。このJYSP以降、「学校ボランティア」として学校で子どもを支援するという「点」の活動から、「地域の活動」を意識して学校や地域で子どもたちを支援するという「面」の活動へと展開されるようになる。

2013年度、「貧困の連鎖を断ち切る」という目的で、生活保護世帯の中学3年生の高校受験に向けての学習支援事業の委託が神奈川区からあり、8月下旬より「JIN-KANA 学習塾」がスタートした。「JIN-KANA 学習塾通信」に発足当時の様子が表れているので一部を引用する⁽⁶⁾。

「中学生たちは、神奈川区から紹介されて、週2回、夜6:30～8:30に神奈川大学の教室に通ってきて、教師をめざしている学生ボランティアと1対1で学習に取り組んでいます。学生たちは『どう説明したらわかるか』悩みながら準備をし、中学生に一生懸命関わり、わかった時には我がことのように一緒に喜んでいきます。そして、ボランティア同士、工夫を共有して進めています。教師をめざすのに『とてもいい学びの場』になっています。」

翌2014年度に2018年度までの5年間の事業を神奈川大学が受託し、「JIN-KANA 学習塾」は、順調に活動が進んでいた。しかし、最後の年度の2018年に次の5年間のプロポーザルに臨んだが、神奈川区役所は大手の教育産業を委託先に選定したため、委託事業としてのJIN-KANA 学習塾は継続できないことになった。継続について大学内で協議を重ね、神奈川大学の独自事業として事業を継続することになった。教師志望の学生に体験の貴重な場を保証すると共に、地域貢献としての学習支援を大学の意思で継続することとなった。

以下、「JIN-KANA 学習塾」の活動について報告したい。

表2 「JYSPと神奈川区との連携事業実績

【事業実績】

2010年～2011年	困難を抱える青少年に対する進路選択支援事業
2012年	困難を抱える青少年のための寄り添い型支援事業
2013年	寄り添い型学習等支援事業
2014年～2018年	平成26年度 神奈川区寄り添い型学習等支援事業

(1) 2017, 2018, 2019の実態

ア JIN-KANA学習塾における支援の考え方

JIN-KANA学習塾における支援は、どのような考えのもと進められてきたか。支援のあり方について開設時の学習アドバイザーであった大場裕治は以下のように述べている。

「そこで、JIN-KANAが発足する前の夏季休業中に学生とともに具体的に『何をすればいいのか』『どのようなことに気をつければいいのか』などについて数回にわたって研修会を開き、共通理解を図った。その中で、①学習の場であること。②原則として個別学習を実施すること。③学習時の座り方に注意を払うこと。④生徒の話を聞く（受け止める）こと。⑤生徒の学習状況を判断しながら学習内容を決めて行うこと。⑥高校入学試験に合格することを目標にすること。以上を基本としてスタートした。所謂『生徒指導』『進路指導』は行わない（行えない）ことも確認した。」⁽⁷⁾。

JIN-KANA学習塾がスタートしてみると、「①学習の場であること」に加えて「生徒の居場所」という考え方が意識されるようになった。活動に参加している学生の青木友美は次のように述べている。

『高校進学』という一つの目標もありますが、それ以上に、生徒に勉強を好きになり、楽しんでもらいたいという思いがあるからです。『JIN-KANA学習塾』が生徒にとって一つの居場所となってくれたら、それは本当に喜ばしいことです。」⁽⁸⁾。

高校進学に向けての学習支援、さらには、生徒たちが安心して学習できる居場所など、JIN-KANA学習塾における考え方は、学生たちの共通理解として発足時から現在まで、ミーティングや、研修会で何度も確認しながら、引き継いでいる。

イ 2019年度 JIN-KANA 学習塾の生徒募集

JIN-KANA学習塾が神奈川区の事業から離れて、神奈川大学の独自事業となったこと

により、今まで参加していた中学生は大手塾の教室に通うこととなった。しかしながら、中にはJIN-KANAでの学びを選ぶ生徒もあり、中学3年生5名、中学2年生4名は、通塾を継続することとなった。大手塾の教室と両方を選ぶ者が大半を占めているが、敢えてJIN-KANA学習塾を選択した生徒もいた。学生ボランティア達の丁寧で温かい対応が、安心して学べる環境として評価されたのではないだろうか。

さて、神奈川区の事業から外れたため、新たな中学生の紹介がなくなり、表3に示したように、参加する生徒も大幅に減少した。2019年4月の参加人数は9名であり、学生ボランティアの活動にも支障をきたすようになった。大手塾と両方に通塾する生徒は、週2回のうち1回のみ参加となり出席率が下がった。そこで、JIN-KANA学習塾が独自に生徒募集を進めることとした。

表3 「JIN-KANA学習塾の生徒数・学生ボランティア数(人)」(2017年度～2019年度)

	中学3年生	中学2年生	中学1年生	生徒数合計	学生数
2017	10	11 (2)	6	27	25
2018	14 (2)	10	8	32	26
2019	10 (4)	4	1	15	18

* 2017年度における中学1,2年生は「のびのび学習塾」の生徒数である。

* 2019年度の生徒数及び学生数は8月22日現在である。

* () 内は外国籍の生徒数である。

参加生徒の募集を進めるにあたり、募集条件の見直しが必要となった。今まで、生活保護世帯等の状況から区役所が対

図4

象とする生徒を選んでいった。これは個人情報保護の観点からも細心の注意が必要で、通塾する生徒については在籍中学校にも知らされていなかった。しかし、近隣中学校等に生徒募集の協力を求めるためには、生活保護世帯等の従来の条件は不適當である。対象とすべき生徒につい

JIN-KANA 学習塾の基本的考え方

- 授業の理解ができるよう基礎学力の定着を図ること。
- 公立高校の入学試験に合格することを目標とすること。
- 安心して学習できる環境を提供すること。
- 個別対応で学習を進めること。
- 英語・数学を中心に学習支援すること。

- (ア) 学校に行けないまたは休みがちだが、学習したいという生徒
- (イ) 授業についていけないという不安を抱えている生徒
- (ウ) 外国につながる生徒

て、神奈川区中学校長会に相談し情報をいただくとともに、学生ボランティア達と検討を進め、JIN-KANA学習塾の基本的な考え方について改めて図4のように確認した。

JIN-KANA学習塾の基本的な考え方を元として、学生ボランティアと検討して右の3点を生徒募集の条件とした。

(ア)については、単に不登校生徒の居場所として機能させるのではなく、学習の空白期間を補うよう学習支援を行うことを目的とするためである。

(ウ)については、学習支援が主たる目的であり、日本語を使って丁寧な個別指導を進めることとした。もし、日本語力が不十分であったとしても日本語指導を中心とした支援は行わない。

以上をもとに「生徒募集のお知らせ」(図5)をJIN-KANA学習塾スタッフの事務職員である万屋さんを中心に多くの方々の協力のもとに作成した。これを5月末に神奈川区中学校長会を中心に、近隣中学校、地域の関係者にも依頼して、配布を開始した。その結果、8月までに、中学3年生5名、中学1年生1名が入塾した。

図5

ウ 外国につながる生徒の参加

JIN-KANA学習塾が生徒募集を実施し、すぐに中学校長から外国につながる生徒の参加について相談があった。2019年5月に来日した中学3年生で、英語は話せるが日本語については日常レベルの会話がやっとであるとのことである。6月に父親とともに訪れ、見学・面接を行い入塾した。続いて7月に2名、8月に1名がJIN-KANA学習塾に関心を持ち入塾した。

4名とも近隣の中学校の3年生であり、来日してからの年数や日本語の習熟度は異なるものの、高校進学を控えている点で共通している。このように外国につながる生徒が急増えたことには理由がある。最初にご相談いただいたのはNPO法人「友ゆうスペース」の塚越代表であった。

「友ゆうスペース」では、外国につながる子どもたちへの学習支援、日本語支援を行っている。しかし、中学3年生の学習支援については大変ご苦心されており、今回のJIN-KANA学習塾の「生徒募集のお知らせ」に強く興味を持たれたとのことである。中学校

レベルの学習支援を行う組織はほとんど皆無であり、

高校進学を控える生徒にとってJIN-KANA学習塾への期待は大変高い。

表4 JIN-KANA学習塾の外国につながる生徒(2019年8月22日現在)

生徒	国籍	入塾日	来日時期
男子A	インド	6月14日	2019(中3)
男子B	中国	6月25日	2016(小6)
女子C	中国	7月18日	2018(中2)
女子D	中国	8月8日	2015(小5)

エ JIN-KANA学習塾の運営

現在、JIN-KANA学習塾は、毎週火・木の19:00～20:40、神奈川大学の教室を使って実施されている。

学習支援は英語と数学を中心に、生徒の希望により社会や理科、国語など他教科にも対応している。授業の理解、中間期末試験対策とともに宿題支援を行っている。「学校の宿題を期限内に提出させること」も大切な支援と考えている。

JIN-KANA学習塾終了後、毎回ミーティング開き、その日気づきを共有している。教科の指導方法だけでなく「生徒と向き合う力」を高める良い機会となっている。

オ JIN-KANA学習塾の組織

JIN-KANA学習塾は、学生リーダーを中心に6人で構成する運営委員会を中心に全体が運営されている。リーダー以外の運営員は、3つの業務グループのリーダーと教科グループのリーダーたちである。運営委員会は専任教員や学習アドバイザーの支援のもと、毎月2回程度開催され、塾運営の課題、中学生支援についての課題、月例ミーティングの議題や進行案などについて協議している。専任教員や学習アドバイザーから、このようなことを検討してほしいなどの課題が提示されることもある。業務グループ1は、基本的な大学生と中学生の組み合わせを立案する。これによって、半年ぐらいの長期にわたって、大

学生がどの中学生を担当するかという担当が決まる。また日々の大学生の出席予定を管理し、その予定に合わせた臨時の組み合わせ表も作成する。グループ2は、参考書や神奈川県公立高校入試の過去問題の収集管理、通塾している中学生が所属する中学校の定期試験などの年間スケジュールチェックなどを行っている。グループ3は、通塾生の振り返りカードやヒアリング調査の結果など個人情報管理、当日出席生徒と大学生の組み合わせが目視できるようにするための、マグネット式のネームカード作りなどを担当している。物品管理や休憩時間のお茶菓子などの準備は、事務職員が手伝って学生が行なっている。

また、教科グループは週2回の塾実施直後のミーティングで、指導方法についての協議を重ねている。学生たちは、先輩学生たちとの協議や、協議への学習アドバイザーの助言などから、教えるということの工夫を学び合っている。この教科ミーティングで得た内容をもとに、塾の開塾時間以外に、自分の大学の授業の空き時間を使って、JYSPの部屋で自作の教材を作ったり、予習したりしている。学生たちにとって、活動の基地としてJYSPの部屋が用意されている意義は大きい。

こうして、学生たちはJIN-KANA学習塾という組織をマネジメントし、数学や英語を中心とした指導法を学んでいる。それは、日本の学校文化でいうと、校務分掌という組織マネジメントと教科会という学習指導法の共有の二つの組織を経験していることになる。このように、JIN-KANA学習塾は学生主体でかつ校長経験者たちが運営の指導に当たる学校組織の体験の場となっている。

(3) 教師養成としてのJIN-KANA学習塾の意義

ア 生徒の気持ちに寄り添う

将来、教師を目指す学生にとって、多様な生徒の存在やその気持ちに寄り添う姿勢を養うことが重要である。複雑な家庭環境をもつ生徒、発達に偏りがみられる生徒、日本語を母語としない生徒等、さまざまな背景を持つ生徒が学校には存在し、このJIN-KANA学習塾にも通っている。

JIN-KANA学習塾では、学生は生徒と個別に対応し、その関係は固定的である。また、一方的に学習内容の説明に終始せず、生徒から話をよく聞き、どこでつまづいているのか、どこに興味を持つのかなど、その反応をよく観察し支援につなげている。表情や態度、何気ない会話から心の変化を感じ、生徒の気持ちに寄り添う姿勢を養っている。

イ 生徒の達成感を感じる

理解していないのに理解しているかを装い授業をやり過ごしている生徒がいる。教師が「わかりましたか」という問いかけに対し、「わかった」とうなずくほうが、授業がスムーズに進行することを知っている。このような生徒達は、正解が板書されるまでノートに写そうとしない。

JIN-KANA 学習塾では、一人ひとりの生徒の学習の状況に合わせ自力解答できるように学習支援を行っている。そのため、生徒の学習の状況を理解することに時間と労力を費やすことが多い。授業ノート、テストの答案、学習中の会話などを注意深く観察し、理解に努めている。

中学生にとって、解答に時間がかかっても待っていてくれることや、どのような質問にも丁寧に答えてくれことが、大きな安心感につながる。生徒の達成感に満ちた表情は、教師を目指す学生にとってかけがえのない経験となっている。

ウ 教師力の育成

一人ひとりの生徒の置かれた環境を考え、生徒の気持ちに寄り添う力、生徒の発達や成長を見とり、達成感を感じさせる指導力、すなわち、「生徒の成長と向き合う力」が教師にとって大変重要な力として求められている。

今年5月に来日した外国籍の生徒は、日本語がわからず、授業中何もしないでじっとしている時間を過ごしていた。7月に入塾し、担当する学生が彼の質問や悩み聞き取り、日本語で丁寧に指導していったところ、彼の表情や態度が一変した。

JIN-KANA 学習塾では学生が生徒と個別対応で学習支援を進めている。支援を生徒の成長にどのようにつなげるべきか、ディスカッションの中から考えを深めている。2018年の夏季研修会では、JIN-KANA 学習塾は普通の塾とどこが違うのかについて議論した。全てが違うわけではないが、JIN-KANA 学習塾の特徴はなんなのかを話し合った。協議の振り返りとして、ある学生は次のような記述をしている。『JIN-KANA 学習塾では「勉強する」ことを通して、生徒が自己成長を感じることができるよう活動を行っていかねばならないと感じた。例えばJIN-KANAでは学校の課題をきちんと提出する支援も行っているが「課題を期限内に提出すること＝やるべきことを期限内にやること」は子どもたちが社会に出てからも大切なこと。このことをきちんと習慣化し、学習支援を通して、彼らが社会に出てからも必要である能力を養っていくことが大切だと感じた。』こうして、

学生たちは、教師としての大切な役割を体験していることに改めて気づいていく。学力や成績を伸ばすために学習をすることはもちろん大切であるが、もっと大切なことは中学生が大学生と一対一で活動することで「信頼関係」を構築することである。人間関係の構築の中で様々な成長をしていくことを、中学生も大学生も共に学んでいるのである。

5 教師論的な捉え直し

教師とはそもそもどのような存在か。教科指導という窓を通して人類の知的遺産を正しく継承する専門家であるとともに、その遺産を継承する側である子ども一人ひとりの発達の実践家でなければならない。特に中学校、高校の教諭は、自分の専門教科と子どもという二つの存在をつなぐ仕事である。多くの学生は、教育実習で免許教科を教えなければならないという重圧から、授業を教える人というイメージを強くしていると思われる。もちろん、大学では、教職論や教育原論など教職系の沢山の科目を学ぶことから、教師の全体像は言葉では言えると思うが、子どもと向き合うイメージは掴みにくい。教科の専門が弱ければ、学びを導く存在として頼りなく、信頼されない。しかし、子どもがいなければ授業はできない。学び手がそこにいて初めて授業ができる。授業進行が教科書の内容を説明するだけであれば、相手がどんな子どもでもその集団が我慢できそうな授業展開を構成すればいい。構成した授業内容を、軽妙なトークでつないで、興味を失わせない授業を進める教師たちを現場で垣間見ることはそんなに難しいことではない。しかし、子どもには一人ひとりそれぞれの理解や事情や、あるいは希望や失望があり、その子どもの全体像と向き合い、その成長を手助けする仕事だという深い理解を得て熟練した教師になるには時間がかかる。なぜなら、「子どもの成長と向き合う力」は、書物を読んでも身につく力ではないからである。

佐藤学は、教師の実践的知識として、個人的知識、経験的知識、状況的知識、事例知識、暗黙知の5つを挙げ、教師は「反省的实践家」とであると定義している⁽⁹⁾。佐藤によれば、教師は毎日の個人的経験を通して、個別具体的な生徒の在りように即した知識形成をしている実践家であるという。生徒一人ひとりは、生活体験も違うし、学習歴も違う、グローバル化が進む現代日本ではナショナリティのバックグラウンドも一人ひとり異なる。その一人ひとりの生徒にとって「教師」でいるためには、教科知識の専門性やチーム教師のひとりとしての行動だけではなく、その子どもの学びを見とり、その子どもの成長に向き合

う力を身につける必要があると思う。

教師を目指す学生たちは、自分だけの特殊な学校体験から学校や教師を理解している。強く教師を志望する学生も、部活動の先生の指導を受け入れ憧れた自分の過去が重要な志望理由だったり、自分の専門教科への興味関心から膨大な知識を持って尊敬されていた先生を理想としたりしている。教師を目指す多くの学生が、自分が学校生活の中で浴びてきた光を求めて歩もうとしている。しかし、実際に教師になった時、自分が生徒だった時のような生徒ばかりではなく、規律に従えない子ども、自信がなく発言を避けて通る子ども、家庭に不安があり学校で自分らしさを表現できない子どもなど、教師の眼差しがむきにくい子どもも沢山いる。教室には、光を浴びてのびのび育つ子どもばかりでなく、教室の四隅で光を浴びない子どももいる。学校等ボランティアを通して、指導に従えない子や積極的に学習に参加できない子ども、不幸や困難と微力ながら戦っている子どもの存在に気づくことも、神奈川大学の学校等ボランティア活動の大きな意義である。

最近の行政文書で教師像を見ると、子どもに寄り添う力、教科を指導する力、授業や行事や学級などを経営する力、地域社会と関係を取り結ぶ力、教員集団のひとりとして役割を担う力、などが教師力として列挙されている⁽¹⁰⁾。教師は様々な力を求められる。子どもからの期待、親からの期待、社会からの要請など全てに応えるため、授業、学級、行事、部活動、地域との関係など様々な分野で、他者を満足させるために努力している。このことを、佐藤学は、「教育消費者としての保護者や、納税者としての市民に献身的にサービスを提供する公衆のしもべへと変化している」と述べている⁽¹¹⁾。私は、たくさんの力を並列して発揮するのは教職員としての教師であり、子どもの成長と向き合う教師の姿とは少しずれているような気がしてならない。

教師は自分が活動することを通して、他者を活動させる複雑な仕事である。教師は教壇という場での役者であるとともに、生徒を主役として活動させるプロデューサーでなければならない。生徒集団や生徒個人を理解した上で、教材への深い理解に基づいた学習プロセスのデザイン、そして授業や指導をしながら個々の生徒への学習支援を進める。生徒は、先生が描いたデザインの上を走りながら、先生に励まされ、先生に認められて、最終的には、先生のデザインを超えた成果を上げて自分の成長を実感する。この教師観には常に生徒への継続的理解と支援がある。知識を獲得して、その知識を整理して生徒に伝え、生徒がそのことをどれくらい理解できたかを評価するという指導観とは異なる。

この指導観にたった指導を実現するためには、有能な教師になろうとするよりも、一人

ひとりの生徒をその個性に合わせて、あるいはその成長に合わせて理解しようとする生徒中心の生徒理解が必要である。この生徒理解の感覚こそ、学校現場でしか育たないものである。これは、学校ボランティアでも、大学構内で実施しているJIN-KANA学習塾でも同じように、生徒の言葉や生徒の活動を注意して観察し、相手に合わせて関わろうとすることで身につく感覚である。学校現場の多くの先生たちが子供のその日の状態をみとりながら適切な指導をアレンジしながら実行している。JIN-KANA学習塾では様々な困難を抱える中学生たちのささやかな反応から学習の状況を読み取りながら、学生たちは教師のまなざしを体験している。教師には、学び、活動し、悩み、成長する子どもという成長主体と向き合う実践家としての力が必要である。その力に気づくのに、神奈川大学の学校等ボランティア活動の体験とそれを支える振り返りの仕組みが大変有効な力を発揮していると思う。

おわりに

この小論では、2017年からの学校等ボランティアの状況を記録するとともに、どのような考え方でボランティア指導をしてきたかを記録することを目的として作成した。あえて統計的手法を用いなかった。個々の学生の気づき、その気づきから我々が学ぶものを言葉に落としてみたかった。ただ、教職のあるべき姿について実務家としての整理が不十分であることに気づかされたので、今後は教師としてのあるべき姿について、教職論的なアプローチをして本論文の不足していたところを研究したいと考えている。

【注】

- (1) デイヴィッド・コルブ, ケイ・ピーターソン「最強の経験学習」辰巳出版 (2018年), p.28。
- (2) 松尾 睦「経験学習入門」ダイヤモンド社 (2011年), p.56。
- (3) 入江 直子『「学校ボランティア」10年のあゆみ』『神奈川大学 心理・教育論集』第35号 (2014年3月) 参照。
- (4) 「神奈川大学ボランティア通信 2018年前期」神大ユース・サポート・プロジェクト (2018年10月)。
- (5) 「神奈川大学ボランティア報告書」神大・ユース・サポート・プロジェクト (2019年2月2日)。
- (6) 入江 直子「はじめに～神大と神奈川区の協働による『JIN-KANA 学習塾』オープン」『～ JIN-KANA 学習塾通信 No.1』所収 (2014年2月)。
- (7) 大場 裕二「学校ボランティア13年の歩み 2 JIN-KANA 学習塾に関わって」『神奈川大学 心理・教育論集』第35号 (2014年3月), p.199。
- (8) 青木 友美「JIN-KANA 学習塾で得たもの」『JIN-KANA 学習塾通信 No.1』所収 (2014年2月)。
- (9) 佐藤 学「専門家として教師を育てる」岩波書店 (2014年), pp.73-78。
- (10) 中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い, 高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」(答申) (2015年12月) に今日の教員に求められる多様な力が示されている。
- (11) 佐藤 学「教育改革の中の教師」『岩波講座 変革への展望4 学びの専門家としての教師』所収, 岩波書店 (2014年), p.14。